

岸田日出刀の戦後寺院建築にみる「日本趣味建築¹」の特徴と変遷

Characteristics and Transition of "Japanese-Taste Architecture" in Postwar Temple by Hideto Kishida

○ 勝原 基貴², 大川 三雄¹
Motoki Katsuhara², Mitsuo Okawa¹

Abstract: As part of a study to clarify the historical aspect of "Japanese-taste architecture" in temple architecture, I focused on postwar temple architecture (Kitamido and Seifu-ji) designed by Hideto Kishida (1899-1966) and revealed the architectural characteristics, and also examined Kishida's view on "Japanese-taste architecture" which will be a basis for postwar temple architecture and its transition based on the discourse. As the result, I found his attitude had gradually changed from the early westernized expression to the fusion with Japanese tradition seeking for a new style of temple.

1 はじめに

岸田日出刀は、建築家であり、特に建築の造形意匠(きした ひでと, 1899-1966)方面を専攻する学者として長きに渡り東京大学教授を務めた。いち早く近代主義建築の解釈に取り組み、戦後建築界の再建、東京五輪の施設建設と道路公園に対するデザインポリシーの指導や丹下健三、前川國男、浜口隆一らを輩出し、建築界を背後から支えた人物として知られている²。岸田に関する先学の研究として、一連の著作³のうち『日本建築史』の歴史叙述に着目したもの⁴があるが、主に戦前の岸田の近代主義者の日本建築史観の把握に主眼が置かれており、戦後の建築作品に触れた論考は少ない⁵。

本稿では、寺院建築における「日本趣味建築」の史的様相を明らかにする一環として、岸田が設計した戦後の寺院建築（津村別院と清風寺）に着目し、これらの建築的特徴をまとめるとともに、一連の建築評論随筆集での言説や「震災記念堂」のコンペ案を元に、岸田の戦後寺院建築にいたる「日本趣味建築」の見解とその変遷について考察を行いたい。

2 岸田の戦後寺院建築にみる建築的特徴

2-1 浄土真宗本願寺派 本願寺津村別院

大阪・御堂筋の北側に位置する津村別院は北御堂とも呼ばれ、戦災で焼失した本堂を岸田の設計により再建（1961(S36)着工, 1964(S39)竣工）する。内田祥三

による南御堂（真宗大谷派難波別院, 1961 (S36) 年竣工）が伝統的な木造寺院の意匠を簡略化した R.C.造建築であるのに対して、津村別院は地下二階、地上四階建の R.C.造建築で、本堂の階下には結婚式場、大阪会館、地下駐車場を備えた複合施設となっている。

反りを抑えた宝形造の瓦葺きの屋根を載せており、軒回りに平行椽、躯体は柱梁構造の真壁風デザインを採用し、屋根と躯体部分の一体感を高めている。木造の軸組構法の特徴と軌を一にしている。外周道路との境界には石垣があり、また内庭に設計段階では芝などの造園的要素がみられる。周壁の内側に本堂を内包しており、正面には天平時代の建築様式を取り入れたという R.C.造の山門を有する。

2-2 本門佛立宗 清風寺

津村別院に先立つこと 8 年前の 1956 (S31) 年、岸田は大阪市北区に清風寺を設計している。直線的な宝形造の瓦葺きの屋根、躯体は大壁風のデザインを採用している。疎らに椽の表現を残し、軒下の手すりに東洋風の装飾がみられる。『縁』(S30)にて竣工直後の写真(図3)を掲載し、そのキャプションに「清風寺本堂(新しい様式の寺)」と記している。

3 岸田の「日本趣味建築」の見解

学士会館(1924(T13)実施)で、表現主義の入ったコンペ案を提出しているが、1925(T14)年に行われた

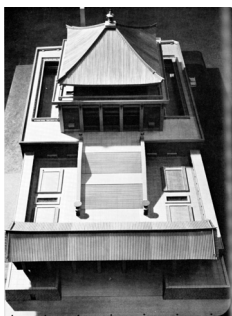


図1 津村別院模型 (1964年)

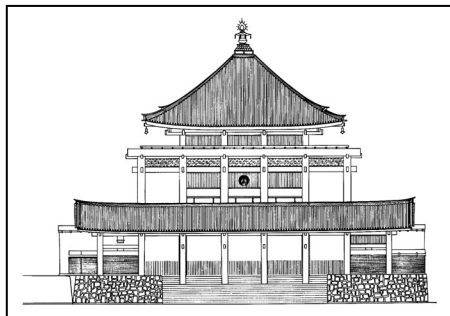


図2 津村別院 立面図

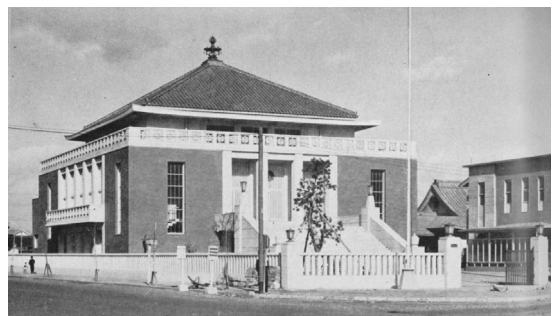


図3 清風寺 (1956年竣工, 現存せず)

1: 日大・理工・教員, Prof., College of Science and Technology, Nihon University

2: 日大理工・院・建築, Graduate School of Science and Technology, Nihon University

震災記念堂設計競技では、クラシックな西洋建築を簡略化した躯体に寄棟屋根を載せた作品を提出する。(図4) ここでも宝形造の屋根形状を用い、明快な幾何学的なフォルムをもたせている。尖塔や立面の大部分を無装飾の列柱で圍繞するなど、「記念性」を新古典主義の建築様式で表現している。

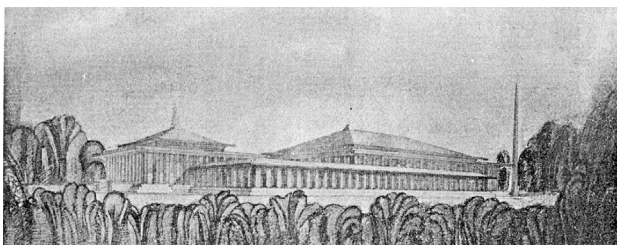


図4 東京大震災火災記念建造物設計懸賞応募図案 岸田案 (1935)

晩年は自らの建築活動を振り返り当時の未熟さを認めているが、特に満州事変以後の非常時を叫ぶ社会相の反映から議論されるようになる「日本趣味建築」について自らの随筆で触れている。「日本趣味建築」の意匠的技術に関して『薨』所収の随筆(S10)では、「西洋風の衣装を借りてくることはどの道つまらぬこと。」⁶と云い、これを「手っ取り早い方法」としてあまり感心できないとしながらも、「日本的な趣味の意匠でありたいといふことは文句なしに結構なこと」とし、古くからよい伝統をもつ日本で、日本趣味を建築に表現することを肯定的に捉えている。

「東京の新建築を語る」(S8)では「日本趣味の実例を挙げると言はれるとこまるが、遠くない将来に必ずこれだといふようなのが示される時期が来る」と述べるに留まっているが、「日本趣味の建築と今日の社会相」(S10)では、歌舞伎座、震災記念堂、東方文化学院東京研究所をあげ、建物とその内容が一致しているものには好感をもつとしている。さらに『聖』(S13)所収の「昭和十二年の建築意匠」では「ここに言う日本趣味の建築という部類の中には普通の日本風和式の住宅や、在来の意匠形式を大体そのまま踏襲した神社や寺の建築は含まないことにする。」とし、「日本趣味建築」を意匠方面から考察対象とする場合、その規定に限定を加えている。また同書では渡辺仁「東京帝室博物館」(S12)を写真入りで掲載し、「所謂日本趣味の建築といふものを代表する最も大きな実例の一つ」とし、日本精神に立脚する建築の発展段階の最後(一つの終止符)と位置付ける。

このような見解には日本の建築状況への苛立ちが読み取れる。また安易な意匠的技術に否定的な姿勢は、下田菊太郎の「帝冠併合式」を「捏造された

る一種の奇形」であり「狂建築」と酷評した伊東忠太との相同性が指摘できる。伊東は「熱河古蹟」の調査を通して、純チベット式との器械的混合ではない幾分支那化された下屋(紅台)を評価し、上下の融和が図られているものを肯定的に捉えた。岸田は評伝本『建築学者・伊東忠太』の出版、土浦亀城と共著で『熱河遺蹟』(1940)を出版する。高松稲荷の仁王門(1958)は、印度のストゥーパを模したR.C.造の石張りである。伊東からの影響が確認できる。

また屋根のもつ造形上の重要性を指摘し、日本の風土気候には勾配屋根が必要とする。屋根面の照りと軒先の反りは、しばしば支那大陸との交渉をもって曲線化したことを述べているが、「日本建築の曲線には節度があり、また洗練された優美さをもっている。」とし、日本で応用された曲線とその起源である支那建築とは異質であることを主張している⁷。

4 まとめ

初期の西洋の影響を受けた表現から次第に日本の伝統との融合を目指し、新しい寺院の様式を求める姿勢を読み取ることが出来た。伊東らへの畏敬の念が見受けられ、上下の融和に意欲的な工夫がみられる。退官後の晩年は清水建設の顧問を務めながら、寺院建築に限らず「根強い日本の伝統を活かそうとした」建築を手掛ける。戦後建築界での主役は丹下・前川らの世代に引き継がれるが、モダニズムと伝統の交流という岸田独自の追求が行われていた。

<参考文献>

- 文献1) 『岸田日出刀 上・下』(相模書房, 1972年)
 文献2) 五十嵐太郎「岸田日出刀: 丹下健三を世に送り出した男」(『建築文化』, 2000年1月) p.p.150-151
 文献3) 佐藤利之「国家記念の場に関する岸田日出刀の構想と見解」(『建築史学』, 2001年9月) p.p.41-53
 文献4) 大川三雄「渡辺仁: 歴史主義の成熟とモダニズム」(INAX Report No.183, 2010年1月) p.p.4-16
 文献5) 橋守知子ほか「明治末に論じられた『日本趣味』発現の手法論」(日本建築学会計画系論文報告集, 1993年)

<図版出典>

- 図1: 文献1), 図2: 文献1), 図3: 『緑』(相模書房, 1958年) p66, 図4: 『建築雑誌』(1925年1月)

¹新技術(RC造)を用いた新しい建築に日本の伝統的建築の具象的モチーフを採用して日本的表現を試みた建築であり、建築における日本的表現を真摯に追求する姿勢から生まれた和風コンクリート造の建築。(大川2010) 明治期の「日本趣味建築」の成立背景を探った橋寺(1993)がある。

²文献1), 文献2)のほか、『建築雑誌』に掲載の追悼文を参考にした。

³著作活動として主に戦前に『オットー・ワグナー』(S2), 『過去の構成』/『現代の構成』(S4), 一般向け建築啓蒙書『日本建築史』(S7), 『日本建築の特性』(S16)のほか、建築評論随筆集『薨』(S12), 『聖』(S13), 『扉』(S16), 『窓』(S23), また戦後に同じく相模書房から『緑』(S30)を出版している。戦後はこの他に『焦土に立ちて』(S21), 『京都御所』(S29)などがある。

⁴三橋雅博「岸田日出刀の『日本建築史』に見られる近代主義者の態度について」(学術講演梗概集, 2008) p.p.307-308

⁵岸田の一連の発言を元に、国家記念の場(「靖国神社神域拡張計画」)に関する構想と見解の歴史的経緯を考察したものに佐藤(2001)がある。

⁶「日本趣味の建築と今日の社会相」(S10)『薨』(相模書房, S12)所収
⁷岸田日出刀『日本建築の特性』(S16, 第三刷S18) p.p.7-12